

関係するころざし読本の資料「いささかなりとも働いてこそ」



読み物資料等の内容

平成23年3月11日。東日本大震災の地震や津波による被害で多くの方が犠牲になりました。被災した方々のために高志さんは一週間募金活動を行いました。少額しか集められず自信をなくしていました。相談を受けた母は、百年近く前の関東大震災のときは渋沢栄一翁が「私のような老人でも、いささかなりとも働いてこそ、今まで生きていくの申し訳がたつようなものだ。」と家族に伝えて震災に立ち向かったという話を高志さんに話してくれました。「日本の復興のために何が大切なのか」について、栄一翁はどんな考えをもって行動したのでしょうか。これからの自分について、どんなことを考えますか。

授業の様子



児童の感想



栄一翁は「今の自分なら何ができるかを考えて、勇気をもって行動するんだ。」と考えたと思います。私も大切なことだと思います。

栄一さんは、自分が老人でも何か自分にできることを考えて少しでも被災者の人を助けたかったと思います。これから私も自分にできることをやって、みんなを助けたいです。



栄一翁は「だれかがやってくれるからいいや」ではなく、今の自分に少しでもできることをやろうと考えていたと思います。私も他人まかせでなく、自分事としてとらえて行動しようと思います。

栄一さんは83歳でも「何かできることをやらなきゃ」と考えたと思います。私は「子どもだからなにもできない。」と思わず、少しでもいいから何かしたいなと思いました。



授業を参観した
教員の感想



授業のはじめでは写真資料を使って、東日本大震災の様子をわかりやすく紹介していました。大正12年9月1日に起きた関東大震災についても説明がありました。当時83歳だった渋沢栄一翁が関東大震災で水も食糧もない東京に残り、復興に尽力した姿や、復興にける熱い思いが児童に伝わりました。また、主人公の高志さんが最初に始めた募金活動でつまづきながらも母から聞いた栄一翁の言葉から、勇気をもってボランティア活動を再開した姿に感動しました。児童のみなさんも晴れやかな表情をしていました。